# 今、行政に求められているもの——曽根純雄

「まち1986」を久しくツンドクしていたが、読んでみた。難しいテーマで、読めば読むほど、感心したり疑問に思ったりでまとまらない。

そこで、旭区役所に十年あまり勤務していた時のことなどを思い出しながら、気がついたことについて述べてみたい。

「地域社会」「地域コミュニティ」という言葉は、「よこはま二十一世紀プラン・旭区区別計画」を策定している中で使っていたのだけれども、自分の生活に結びついたものとしてはとらえてなかった。そういった意味では、地域について、また地域社会について考え直す良い機会ではあった。

希望が丘に住み始めて、二年半、顔見知りになり、あいさつを交わす人は何人いるだろうか？　まだ多くはないことに気がついた。

確か、旭区民会議で「地域連帯を考える」等、地域の問題について話し合いが持たれた時、団地の住民が「隣近所とのつきあいの煩しさから団地に来たのだと言われたが、子供会、学校など子供を通してのつながりから自然に話し、コミュニケーションがとれるようになった。それまで十年の月日がかかりました」というものがあった。この発言にみられるように、住民一人ひとりは、それぞれの生活の中で、地域の中で、地域の重層構造のいくつかを選択し、結びつき、連なっている。

こうしたことを見てみると、何も活性化だとか言わなくても、地域は進み方は遅いがそのままで十分であり、行政は、土壌づくり、情報ネットワークの整備など、どちらかと言えば、補完的な面をよりきめ細かくすすめるべきだと思う。

そうしたハード面の整備とともに、行政の組織も、それなりに変えていくことも急がなければならないだろう。現在の機構では、区の職員は、区民一人ひとりに接してはいても、さらに地域まで接するということは難しい。区の職員が地域の実情を十分につかめてはいないというのは当然である。現実には、事務量に応じた人員配置であり、事務量を超えて「地域活動と苦労をともにする」などということは不可能なのが現状です。

現在のこうした「行政のタテ割り構造」を超えて、地域活性化のための行政施策を考え、行動していける職員がどれだけいるだろうか？

そのために「地域担当制の導入」「総合調整機能の充実」という提言がされているが、具体的に理解しにくい。また区役所の地域対応の現場として、区政推進課、市民課、福祉課が挙げられているが、いずれも係としては三人から八人程度の比較的少数人員の係であり、「地域担当制」を導入するには大幅な人員増が必要になってくるのではなかろうか？

様々な問題が考えられるが、結局、地域の活性化といっても、現実に住民は、「その場その場で地域の重層性を巧みに、したたかに使いわけ、様々な課題をこなし」ている。行政に求められているのは行政（職員）がいかに地域の活力とともに歩み、行政と地域との役割を分担し合えるような行政のフレキシブルな組織づくりではないだろうか？

この報告書を読んでいて、納得する部分がほとんどであったが、それとともに現実とのギャップの大きさを感じている。「これからの区のあり方」なども検討されている中で、区の機構がどう変わっていくのか、一現場の職員として見つめていきたいし、また「地域を知る」という視点を持ちつづけたいと思う。

〈保土ケ谷区福祉課地域福祉係〉

# 千秀地区に住んで思うこと——小巻三枝子

大変興味深く読ませていただきました。東京から地付の農家にお嫁に